

東日本大震災1年

失い、涙し、そして希望



人々の脳裏に焼き付く「3・11」から1年がたつ。東北に襲い掛かった東日本大震災。多くのものを失った人々が、一日一日を懸命に生きてきた。苦しみを抱える人がいる。悲しみが癒えない人もいる。それでも、希望の芽は確かに膨らんでいる。心をつなぎ、命を育む営みが、被災地の明日を築く。



写真右(上)震災の日に生まれた橋本奈ちゃん。震災直後に抱っこされた。うれしそうに笑った

写真右(下)氣仙沼市の仮設商店街で披露された百沢舞踊に買い物も足を止めた

写真左 地域の希望もつた「奇跡の本松」のそばで遊学どもたち

産声

あの日、産声を上げた子が、義の誕生日を迎えた。福島市山町の子守屋藤本紀明さん(85)、幸枝さん(84)夫妻の次女(おひりちゃん)が、昨年1月11日震災発生直後の午後3時26分に生まれた。車の中だった。子守屋を連日通夜で通っていた市内の病院にいたとき、地震に揺られた。避難を促され、駐車場の車に乗ったことで陣痛が激しくなった。

間もなく、車内に元気な産声が響いた。「ただただうれしかった」と産後3人は語り返る。

家族の心配もつかの間、福島第一原発事故が起きた。不安を抱えながら市内で暮らし続けた。周囲の心配をまにまげんは、ますます成長した。

新生児に椅子を動かして取り組む市民体君の椅子プロジェクト(北海)と多く、岩手、宮城、福島、3県で震災当日104人の赤ちゃんが生まれた。

多くの人を悲しめた包み(おひり)授かった命「産後1日と心に決まる道は、そのつづきにならなごうほしじょう願って現在まで行けたお嬢を、両親は優しく見守る。

交流

プレムの仮設商店街に感銘のいいおはやしが響く。岩手県大田町の「沢野子踊(しおひり)」が4日、氣仙沼市南町で演じられた。

氣仙沼・天徳にも震災環境的な被害を受けた。交流の機会も、両地域で支援繋げる両山市のNPOが仕掛けた。

大田町からは別人が訪れ、復興を促して意見交換した。又ははわれが大田町へ。氣仙沼復興商店街副理事長の坂本正さん(54)は言う。

南町は、OJO以上が軒を連ねていた。津波で木造の店舗は流され、空っぽのコンクリートの物だけが残った。「このままでは倒壊してしまう」。震災の1ヵ月後、店主らは青森市を始発、12月には仮設商店街に約50店がオープンした。

他の被災地との交流は初めだった。支援がゆる中、情報を共有し、自立的な復興を目指す。

これからは本気のスタート。商店街を復活させた勇社を踊り、店主の心も立てた。

一本松

すくすくと空に向かって伸びる。浜風に枝葉が揺れる。津波と大震災の中、ただ一本の本松がシルエットを描く。

陸前高田市の名勝「高田原松林」。約200の海岸線に万本の松が並ぶ地域のシンボルだった。それを、津波が直撃した。

残ったのは一本。樹幹にもまれながら大地をしっかりとつかんでいた。奇跡の一本松と呼ばれるようになった。

樹齢は約60年を越える。海水に浸った樹干は腐食が一段進み、幹は腐々しい腐蝕が浅る。震災に耐えた松も、いずれは枯れる運命にある。

人々は毎日通った。地元の女性だけが震災に冷たい寒めていた松ほぐりから種取り、市民団体「高田原松林を守る会」に託した。高見の研究機関は「一本松から取った種に播く必要はなく、苗の育成に挑んでいる。

「100年かかっても、松原を取り戻そう。それが、勇気くれた一本松の恩返しになる」。守る会のメンバーは復興を信じている。

東日本大震災1年

被災地の「今」

全て失った でも 一歩ずつ



笑い声がはじけた。宮城県南三陸町安津の平成の森仮設住宅。女性たちが友人宅などに集まり、手作りグッズを制作する。部屋に閉じこもりがちな暮らしの中で、交流を広げようと自発的にグループをついた。アクリルたわし、コースター、ストラップ…。持ち寄った材料で作品を作る。自作の仮設店舗などで販売される作品一つ一つにメッセージが込められている。「ご支援ありがとうございます」

笑

喜



集

仮設住宅のコミュニティ活動。住民同士の交流が盛んに行われ、地域感を取り戻そうとする動きが広がっている。写真：NHK



残

気山町南に佇んでいた徳島「菊18号徳丸」は津波で完全に壊れた。2011年3月12日。気山町南地区には水害により一面がけしきに埋もれ、火災で奪も立ち込めた。津波の猛威を物語る大型船舶は、がれきが埋まされた街の中にも残る一舟。3月4日…。解体するのかが、保存するのかはまだ決まっていない。



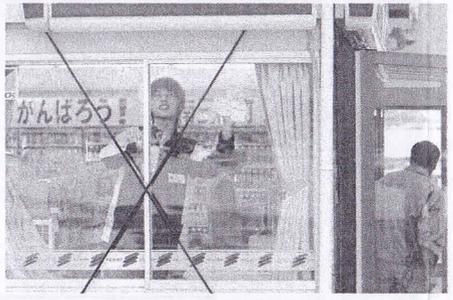
戻

仮設住宅のコミュニティ活動。住民同士の交流が盛んに行われ、地域感を取り戻そうとする動きが広がっている。写真：NHK



継

仮設住宅のコミュニティ活動。住民同士の交流が盛んに行われ、地域感を取り戻そうとする動きが広がっている。写真：NHK



誇

水産業が盛んな気山町の一角で、漁業に向けた動きが活気づく。水産加工業（7号工場）の社長は、この町で生まれ育ち、この町で暮らすことに決めた。工場は昨年3月11日、津波によって廃業。操業不能になった。社員が尻かきなどに汗を流し、昨年12月、再開にこぎ着けた。社長の清水敏也さん(51)は意気込みを語る。「気山産ブランドを守りたい。誇りを持って仕事に打ち込む」



待

福島第1原発事故の発生以降で初めて「帰村宣言」を出した福島県内村。町内で営業を続けるそば屋「楽(たの) 楽(たの) 楽(たの) 楽(たの)」。店主の手塚さん(56)は、店で村民の帰郷を待つ。妻と長男の3人で店を切り盛りしてきたが、原発事故で避難を余儀なくされた。家族を避難先の新山市に残し、昨年6月に1人で営業を再開した。「村民一人ひとりの帰郷を待ちたい。子どもたちに楽しい村を引き継ぎたい」



進

仮設住宅のコミュニティ活動。住民同士の交流が盛んに行われ、地域感を取り戻そうとする動きが広がっている。写真：NHK

道のり多難 でも 諦めない